

公民協働による古民家再生事業の研究—農村地域における ワーク・イン・レジデンスの理念と手法

(特非) 地域公共政策支援センター理事長
山崎茂雄

1. 背景や必要性

人口減少、少子・高齢化の急速な進展は、農村地域の過疎化をもたらし、祭りなど地域のコミュニティや文化の衰退をも引き起こす要因となっている。

これまで国や地方自治体を問わず産業育成、まちづくり、観光など施策や取り組みがなされてきた。その結果、湯布院などいくつかの成功事例もみられた。しかし、それらは限局的な事例としての成功にとどまり、その事業モデルや取り組みの効果が一般性を得て、地域全体に普及・拡大し地域全体の再生に結実するまでには至っていない。また、古民家、空き家再生という学術研究も、建築学、住居学、経済学、人文地理学、社会学などのディシプリンがそれぞれバラバラに研究を重ねてきたといっても過言でない。

そもそも地域の再生においては、イギリスの例からも明らかなように、伝統的技術やまちおこしなどのノウハウを持つ人材が企業とともに再生事業に取り組むことで相乗効果が発揮される。また、行政機関とNPO、企業などが連携を進め、雇用創出を通じた地域の自立を目指すことが必要である（「新しい公共」）。さらに、職人の持つ伝統技術の維持・継承も重要であろう。

一方で、地域社会を取り巻く学術研究機関が連携強化し、その地域の環境変化に対応した創造的な政策研究も必要となる。こうした一連の取り組みが有機的に連携を図ること、これが何よりも地域再生に不可欠である。かかる問題意識を踏まえ、本プロジェクトでは、「ワーク・イン・レジデンス」という新たな再生手法を検証する。研究方法は、インタビュー、フィールド調査を中心とする定性研究を基本とし、対象を福井のほか、富山、石川、岐阜、兵庫、埼玉、千葉、広島、大分、福岡とした。

2. ワーク・イン・レジデンスとは何か

このワーク・イン・レジデンスは、創造産業育成と第三の道を目指したイギリスに起源を持ち、日本では人口6千人の徳島県神山町のケースが有名である。すなわち、徳島のケースでは、建築系大学生（東京芸術大学など延べ二百数十人）、大学助手、職人やボランティアなど五百人以上が関わり、上角商店街内にある長屋の西側空き家一戸を地元NPO法人グリーン・バレーが長期賃貸、改修を進めた。

この企画は、国内外のデザイナー、カメラマン、映像作家、建築家、ライターなどコミュニケーションを仕事に短期間、静かな環境で仕事に集中できる場を安価で提供する代わりに、滞在者は、自分の専門分野を生かした何かしらのおみやげを滞在先に残していくというものである。

3. 何を解明し、何が明らかとなったか。

我々の課題は、ワーク・イン・レジデンスが持続し、内発的な発展を遂げるには何が必要か。また、ワーク・イン・レジデンスが地域再生に何をもたらすかであった。

25年度の研究成果では、その先進事例におけるわれわれの観察によれば、「人間がコンテンツ」という結論を得た。すなわち、**創造的な人間の集積とネットワーク**こそが**情報通信技術と公共部門**の力を得て、創造的な産業を生む。その産業がさまざまなワークショップなどの地域貢献、住民との交流に乗り出す。住民の意識も変化してきた。そうした正の循環のプロセスがみえてきた。本研究においては、この正の循環のプロセスを可能にした基盤、内部要因、外部環境を析出した。

2011年の神山町の社会動態人口がプラスに転じたのは象徴的である。これは、過疎のまちに若いクリエイティブな起業家が流入したことが大きい。代表例は、2013年に東京から移住してきた「えんがわオフィス」の起業家たちである。古民家のなかに、テレビモニターが並ぶ。移住の理由として、①光ケーブルの敷設というハード系の理由のほか、②NPO法人グリーン・バレーの今日に至る活動があった。

このNPOは、地域住民に対する調整：説明を行う。グリーン・バレーは1998年に住民参加型の地域美化活動「アダプトプログラム」を全国で初めて実施した。その後、小規模の神山アーティスト・イン・レジデンスを経験した。アーティスト・イン・レジデンスとは、一定期間その土地にアーティストを招聘し、作品を創作させることで、何らかのお土産を残してもらうというプログラムである。神山では、3か月間、毎年3人に対し、制作費30万円、滞在費・交通費40万円がそれぞれ支給された。

キーマンは理事長の大南信也氏であるが、NPOのミッションは、「日本の田舎を素敵に変える」という創造的過疎およびヒトノミックス「人をコンテンツとしたクリエイティブな田舎づくり」である。それはB級グルメを作ったとしても、すぐに飽きがきてしまうからだという。そのほか、「多様な人の知恵が融合する世界の神山」というミッションもある。

4. 公民協働はいかに機能しているか

元来、町が移住者支援の拠点を運営していた。しかし、町の委託を受けてNPOが神山町交流支援センターを運営するようになる。これがワーク・イン・レジデンスの大きな推進力となった。自分たちで移住者を決められるようになったためだ。

たとえば、NPOのマッチングで大阪から2008年に薪パン職人が移住し、人気を博している。本来、行政主導ならば、移住希望者のなかからの先着順が原則である。それは、行政は公平性が基本だからである。

しかし、移住者受け入れ業務が町から委託された神山町では、NPOによる移住者の「逆指名」が機能し、受け入れる地域と移住希望者とのマッチングが行われる。

すなわち、それは、高齢化率高い地域だからこそ移住の条件に年齢層の若い夫婦や子供2人を定めるといった具合である。

5. 建築がいかに社会のためになるか

もうひとつ特筆すべきは、建築がいかに社会のためになるかという視点である。グリーン・バレーは、ある築 80 年の長屋を改修して、ワーク・イン・レジデンスのプログラムを作った。空き家、町屋をワーク・イン・レジデンスとして活用する場合、グリーン・バレーが一括で借り上げを行う。空き家の持ち主が経済的に困窮した結果、空き家を賃貸するという誤解を生まないためだ。理事長の大南氏が地域社会の再生のために空き家をワーク・イン・レジデンスのプログラムに活用すべきことを持ち主や住民に説得する。そして、使用可能な空き家を増やし、改装して、入居者を募る。こうした一連のプロセスが確立していった。

6. 新しい循環

こうした空き家、町屋に公共性が与えられると、社会貢献の体験を希望する人々が集まり出す。たとえば、空き家の修復に、都市で学ぶ芸術系大学などの学生が神山に集まり、現状調査に乗り出した。また、ハローワークといった行政機関が緊急雇用として地域おこしの人材を募ると、やがて都市から若者が応答するようになった。ここでは、行政が一定期間求職者支援訓練のために公的支援を行いながら、地域再生のためのリーダー的人材の育成を目指す。この人材育成は、神山塾という名称で運営されているが、塾の在籍期間は 6 か月に及ぶ。グリーン・バレーの職人や神山の住人が講師となり、塾生は講師宅に入居する。

川べりでラップトップを開くという、新しいライフスタイルが多くの若者の共感を得た。毎年多くの若者が都市から神山に移住してきている。ここで知り合い、結婚してそのまま残る人々も出始めた。

7. 文化インフラストラクチャーの出現

こうしてこの地に移住し始めた住人達は定期的集う。そのための、たまり場も出現し始めた。カフェオニヴァというフランス料理店は 2013 年に開店した。これは、築 150 年居酒屋を改築して東京の女性オーナーが始めたもので、キッチンには地元の食材やワインが並ぶ。

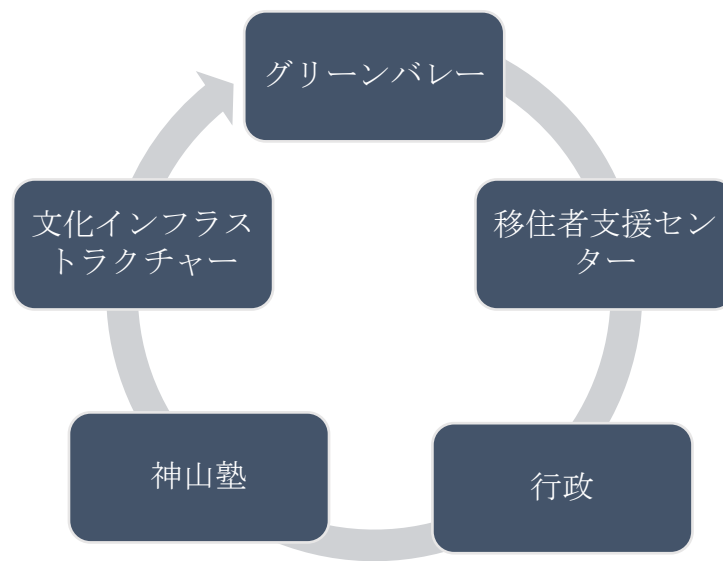
一方、2013 年に開設されたたまり場に注目が集まる。これは、神山バレー・サテライトオフィスコンプレックス (KVSOC) で、元縫製工場であったこの空間は、今では起業家同士や住民との交流に利用されている。

また、IT系サテライトオフィスの隣には、寄井座が位置する。回り舞台や天井に広告版が飾られているが、これらはこれまで地域の大衆文化の中心地としてにぎわい、人形浄瑠璃や演劇が身近に地域住民に提供されてきたことを物語る。現在は、ワーク・イン・レジデンスと有機的に関連した、その活用のあり方が議論されており、さしあたりアーティスト・イン・レジデンスの展示の空間に供されている。

さらに、隠された図書館という施設も住民のたまり場の役割を担う。これは、2012年のアーティスト・イン・レジデンスの招聘作家が企画・設計した文化施設で、住民だけが利用し、みずから図書を持ち寄る。

こうした一連の文化インフラストラクチャーが地域の魅力を高めクリエイティブ人材を吸引し、同時にクリエイティブな人材と住民との交流を深める役割を担う。図のように、この循環は一過性でない創造的再生（Creative Regeneration）を生んでいる。

図1 神山の循環モデル



8. 従来の若者定住促進施策と何が異なるのか

では、これまでの若者定住促進施策と神山町のそれとは何が異なるか。

補助金・助成金を基礎とした従来型の公的支援は、それが失われるとインセンティブが消え持続性を保つのが難しい。また、アートイベントを打ち出す施策では、イベントのあるときだけ人々が来訪し、その後は元の閑散とした村に戻るといことがしばしばであろう。それゆえ、イベント施策は、来訪者・観光者に有効であっても定住者促進に直結するわけでない。

神山町の場合、単発的なイベントがない。すでに述べた神山の循環モデルを生み出すきっかけは、アーティスト・イン・レジデンスの経験である。このアーティスト・イン・レジデンスを通じ、アーティストとまちが10年間歩んできた。このことで、一過性のものでない創造的再生がこの地で起こり始めているといえよう。この神山町におけるライフスタイルがそこで始まっているのである。



図2 寄井座

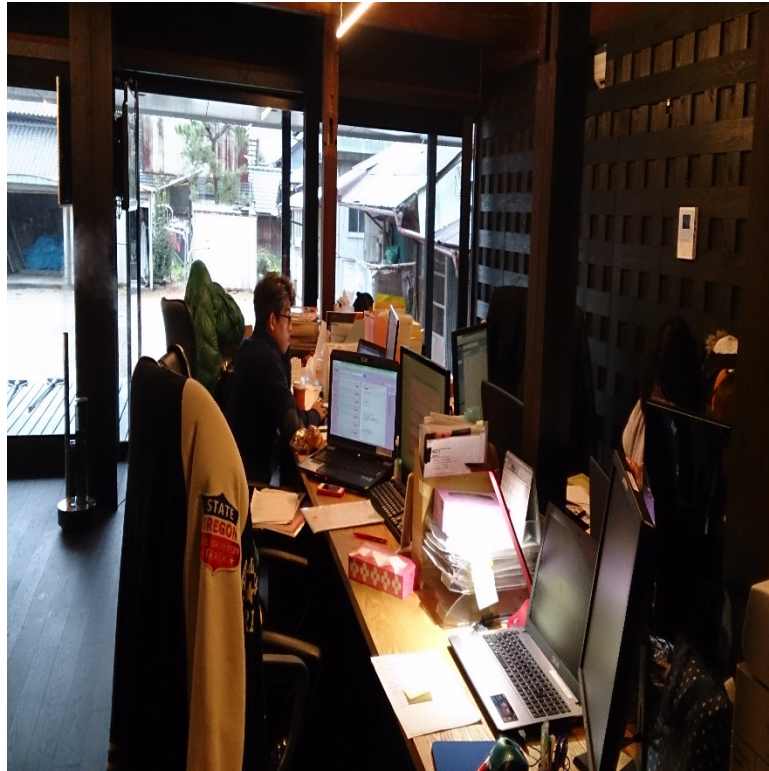


図3 サテライトオフィス

神山町は、日本の地域のなかでアーティスト・イン・レジデンスを10年余り行っている数少ない場所の1つである。アーティストとともに地域をつくっていくという点では、アーティストを招き、そこでパフォーマンスや演奏会、もしくは展示会を開くのは明らかに趣を異にする。アーティストは、地域の人と一緒に暮らして創作活動を実践する点に特徴を持つ。

都市部ではない農村部でアーティスト・イン・レジデンスが行われ、そこでは、いかなる変容が見出されたか。

神山町のアーティスト・イン・レジデンスには、つぎのようなメッセージが謳われている。

「自然に恵まれ人情味あふれる日本の田舎町・神山に身を置くことによって生まれる『インスピレーション』と、住民との出会いによって生まれる『カルチャーショック』によって紡ぎだされる、創意あふれる作品を期待しています。アーティストが、有形無形の「神山 (Gods Mountain)」に触れ合うことで創作される作品を通して、『未知との出会いと交わり』が作家自身に、あるいは神山にどのようなインパクトをもたらすかを探っていきます。」

そこでは、アーティストは単なる来訪者ではない。神山と共生し、神山にインパクトを与え続け、住民との出会い、自然との出会いによって創作してほしいというメッセージが隠されている。

作品は本来、空間と時間、それから地域とのつながり、地域の素材等によって刺激を受ける。特に都市を中心にして活動している演奏家、創作者にとって、空間の問題が、都市において切実な問題である。狭隘な都市は、演奏家に自由で合理的な利用料が設定された練習場所を与えない。この点は舞踏家も同様である。

その場に符合した作品をつくるか、その場ならでは作品を生み出すという創作態度を取らなくても、新しいインスピレーションを自分に与えてくれる環境はアーティストにとってきわめて意義深いことである。アーティストにとっては時間や空間や素材や人とのつながりなど新しい刺激といったメリットがアーティスト・イン・レジデンスに存在する。

9. まとめ

では、地域にとっていかなるメリットがあったか。

そこで創作していた人の作品が展示され、それに伴うさまざまなメリットが生まれる。

まず、普段は若い人が訪れることのないところに、若者がコンスタントに訪れるようになる。最終日の打ち上げの際には、地元の人々とアーティストと、それからそこに訪れた人たちが共感を共有し、ともに盛り上がるということがある。

第二は、そういう活動が行われている神山に移り住もうという若者が少しずつ出始めている。

第三は、神山に戻ってきてそこで子どもを産む人たちが出てきた。社会人口増が起きていることはすでに述べた。

第四は、企業がサテライトオフィスを置き始めたことである。いつも都会の中の狭い事務室で思索しているのではなくて、あるチームは神山に移動し、そのサテライトオフィスでさまざまなアイデアを増殖し出す。そのための装置として、古民家を利用したサテライトオフィスが次第に増え始めている。

これまで述べてきたように、アーティスト・イン・レジデンスを通じ、アーティストとともにまちは10年間歩んできた。そのことで、やがてアーティスト・イン・レジデンスのノウハウや萌芽がワーク・イン・レジデンスという新たなカテゴリーに創造的に拡幅して変容した。結果的に一過性のものではない創造的再生がそこで起こり始めているわけである。少なくともそのときに限り、イベントのあるときのみ人が訪れ、その後は元の閑散とした村に再び戻るというのではない。この神山町における昨日とは違うライフスタイルがそこで始まっているのだといえよう。プロジェクトだけではなくて、地域に新しいジェネレーションが入ってくる、そういう変化が垣間見られるのである。